

玉藻

茨城県立麻生高等学校 玉藻同窓会 会報

第二十七号

発行所

茨城県立

麻生高等学校玉藻同窓会

行方市麻生 1806

TEL 0299-72-0098

FAX 0299-72-2317

<http://www.asou-hibk.ed.jp>

後援会活動報告



後援会長

出沼 一

(高十五回卒)

麻生高校後援会会長の出沼一でございます。後援会会長として、後援会活動のご報告を中心にご挨拶申し上げます。皆様には平素よりご協力頂き、心より感謝申し上げます。

霞ヶ浦と筑波・富土を眼下に眺めるこの麻生高校の学び舎で、生徒諸君は大いに学び、鍛え、人間性を磨き、三年間で目覚ましく成長してい



きます。そうした生徒諸君の成長と、麻生高校の更なる発展の一助となるため、後援会は活動してまいりました。

まず、校内設備についてです。今年度七月から特別棟教室にもエアコンが入りました。地球全体が温暖化し、七月でも酷暑となる昨今、室内での熱中症も珍しくありません。実習教室でも環境整備が長らく望まれていましたが、今年度実現しました。

生徒の通学においても、学校内外の御協力のもと、スクールバス運営を円滑に行われております。交通の便が限られるこの地域において、安心・安全に通学できるスクールバスは、生徒にとっても保護者にとっても、価値あるものとなっています。

こうした後援会活動の主体である保護者の皆様の、御理解と親睦とを図るため、五月には授業参観なども含めた後援会総会が行われております。また、この他にも、毎年七月には研修視察が企画されております。高校生になると、小・中学校の頃より学校を訪問する機会も少なくなってきましたが、こうした機会にぜひご参加ください。

多くの皆様のご協力のもと、優れた人材を輩出してきた麻生高校は、

今年「創立九十周年」という記念すべき年を迎えました。その節目を迎えるにあたり、記念事業の準備も数年前から行なって参りました。今年、十一月には記念式典が行われます。このように、保護者の皆様、卒業生の皆様、地域の皆様と、多くの方々、麻生高校と生徒諸君を見守り、応援しております。

生徒諸君は我々の応援にこたえてくれるごとく、今年度も学習に励み、見事に進路希望を叶えました。また部活動でも、女子ハンドボール部の東海インターハイ出場をはじめ、数々の大会で輝かしい活躍をしています。未来を担う若者である麻生高



校生の姿は頼もしい限りです。麻生高校の益々のご活躍をお祈りし、楽しみにしております。

ごあいさつ



学校長

中島 敏治

(高29回卒)

はじめに

麻生高等学校の卒業生並びに後援会の皆様には、麻生高等学校の教育活動に對しまして、ご理解・ご支援をいただきましてありがとうございます。昨年度に引き続き、校長を務めておりますので、よろしくお願いいたします。

麻生高等学校は、昭和四年に茨城県内で十番目の県立中学校として開校しましたが、昭和二十三年の学制改革に伴い茨城県立麻生高等学校と改称し、さらに、昭和四十九年四月一日より現在地へ移転いたしました。私は旧校舎で最後の入学式を行った翌日から、新校舎への移転作業を経験した学年です。私たちの学年は一学年七学級編成でしたが、昭和五十二年四月の入学生から一学年八学級となりました。その後、地域の少子化の進行に伴い学級減が続く、現在では一学年五学級編成の中規模校となっております。

麻生高校生に期待すること

生徒数減少に伴い、進路実績も一時低迷していましたが、本校生の中には潜在能力が高い生徒がいます。ただ、多くの生徒が努力不足のために高校在学中にその能力を十分に発揮できていないと感じています。

そこで、私は昨年度から、麻生高等学校の『ASO』の三文字を使つて、生徒諸君に行動指針を示しました。本年度は、次の三つを行動指針として示しています。

まず、『A』ですが、これは『Ambition』すなわち、『大きな志』をもつことです。「絶対に実現するんだ」という大きな志をもつて、努力を継続して欲しいと思います。

二つ目の『S』は『Selfcontrol』です。日本語では『自制心』という意味になります。「学力テストで測定できない人間の気質や性格的な特徴を『非認知能力』と言い、『非認知能力』を鍛えることが人生の成功において極めて重要である」と、慶応大学の中室牧子准教授は「学力の経済学」の中で述べています。特に、非認知能力の中でも、人生の成功に長期の因果関係を持ち、教育やトレーニングによって鍛えて伸ばせる能力として、『Selfcontrol(自制心)』と

『GRT(やり抜く力)』の二つを挙げています。そして、何かを繰り返して、継続して行うことで非認知能力は向上するといえます。部活動や生徒会活動などの課外活動が有効であるとのことですので、本校生には学習に励むとともに課外活動にも積極的に参加していただきたいと思っています。

三つ目の『O』ですが、これは『Outgrow』です。この単語は、『殻を打ち破って成長する』という意味です。勉強でもスポーツでも、得意分野を伸ばすためには、1日2〜3時間以上の演習やトレーニングをコツコツと積み重ねる必要があります。何事も「継続は力なり」ですが、先程述べた『GRT(やり抜く力)』がないと途中で諦めてしまう恐れがあります。やり抜くことで、得意分野を伸ばすことができるわけです。『学習』を科学的に定義すると、「過去の経験により行動が変化すること」、換言すると、「今までと違った新しい自分になること」を意味します。学習すること人間は変わるのです。本校生には、勉強やスポーツに継続して取り組むことで、得意分野を伸ばし、今までの自分の『殻を打ち破って成長』してくれることを期待しています。

創立90周年に向けて

この二年間を振り返りますと、本校生の活躍には目を見張るものがあります。まず、進路面では平成29年度卒業生において、国公立大学に12名の合格者を出すことが出来ました。筑波大学には2名合格いたしました。筑波大学に複数名合格者を出したのは、昭和60年に4名合格者を出して以来、33年振りの快挙です。

部活動におきましては、昨年、ハンドボール部が男女ともに関東大会出場を果たしました。さらに、女子ハンドボール部は、全国高校総体茨城県予選において、水海道二高を破り、20年振りの全国高校総体出場を果たしました。文化部の活動においても、二年生の平塚舞さんが、佐賀県で行われる平成31年度全国高等学校総合文化祭に茨城県代表として出品することが決定しております。これも、ひとえに本校職員の熱意溢れる指導とその指導に当たってくれた生徒諸君の努力の賜です。

麻生高等学校は今年創立90周年を迎えます。教育活動を充実させ、本校生が自己実現を果たしてくれることで、本校の伝統がさらに輝きを増すことを祈念しています。

郷土班と石棺復元の思い出



川尻 勝

(高14回卒)

小生が麻生高校を卒業し、間もなく60年になります。平成29年の東京玉藻会で中島校長先生との雑談の中で、石棺が校舎移転の際に移設されているとお聞きし、長い間気にかかっていた事の糸口に辿り着く事が出来ました。実際に確認できたのは、昨年9月20日、東京玉藻会有志による故郷を巡るバス旅行で母校を訪問した際の事でした。復元石棺との感激の対面、60年前の当時そのままの姿に安心致しました。

昭和34年4月、麻生高校入学に際し、早速興味の有りました『郷土班』に入部しました。郷土の歴史を勉強研究する部活です。顧問は日本史を受け持たれた大森信英先生が担当され、1・2・3年生約20人の部員が活動しました。内容は座学と夏休みの遺跡発掘調査で、貝塚や住居跡、古墳土器等を発掘し移設復元等を行いました。発掘調査は何が出土されるか検討のつかない、わくわくする夢

のある楽しい時間でした。

この石棺発掘は昭和35年2年生の夏休みの活動だったと思います。場所は水戸市内原辺りの畑の中で古墳の面影は無く表土を剥ぐとすぐに黒い石棺の一部が見える状態でした。

期待に胸を膨らませ、測量をし丁寧に土を取り除き、いよいよ天板の石板を開ける瞬間は期待が最高潮に達しましたが、それは開けた瞬間直ぐ落胆に変わりました。中はカラッポで少し土砂が流れ込みかび臭い土のニオイの中に名前の分からない虫が2、3匹飛び跳ねていました。諦めきれず丁寧に土を取り除いても何も出土されません。何時の時代かに盗掘された後の様で、部員皆本当にがっかりしました。



石片を1枚毎に丁寧に記録し、取り外して持ち帰り、旧校舎の正門を入り右側

直ぐの植栽の中に復元しました。この石棺が何時代か何某の墓なのかは残念なが

ら記録も無く不明のままです。

小生は母校が新校舎へ移転後一度も訪れた事の無い、母校不幸者でした。反省致して居ります。これからは麻生高校発展の為に微力ながら尽力させて頂きたいと存じます。

写真も記録されたものも何も無く薄らいだ60年前の記憶を辿りながらの記述になりました。記憶違いはご容赦お願い申し上げます。ご興味のある皆様は母校を訪れた際には是非お立ち寄り下さい。

【活動の記録】

・昭和34年8月 1年生時

霞ヶ浦が見下ろせる丘陵中腹での住居跡・貝塚の発掘調査。縄文式土器の破片や石器(矢じり)が出土しました。土器は破片を繋ぎ合わせ、足りない部分は石膏で固め復元し、校舎内に展示しました。

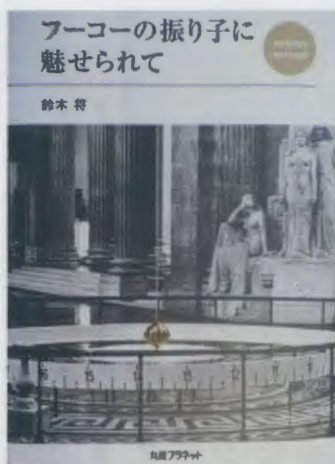
・昭和35年8月 2年生時

石棺の発掘調査と復元。バスで玉造、そこからガソリンカーで石岡へ。常磐線内原駅で下車し、発掘現場に通いました。

・昭和36年8月 3年生時

古墳の発掘。家の近く小高村谷津の雑木林の中に小高い円墳か方墳の様な小高い塚(高さ10m位か)の上から1m位掘り下げましたが何も

出ず残念な結果となりました。その後、地区の長老の談によれば、何か祭り事に使われた祭壇で、古墳ではないとのこと。残念でした。追跡発掘に関しての公的な諸手続は大森先生が行われたと思います。

◆ ◆ ◆
卒業生から本の寄贈

本校の高第五回卒業生の鈴木将さんから、本の寄贈がありました。鈴木さんは、本校を昭和28年3月にご卒業後、東京都立大学理学部物理学科に進学され、その後人文文学部心理学専攻を卒業。大学卒業後は、東京都立高校の教員をされていましたが、この度、「フーコーの振り子に魅せられて」を上梓されました。図書館に置いてありますので、生徒の皆さん、ぜひ読んでください。

母校創立九〇周年に寄せて



琉球大学

望月 道浩

(高46回卒)

母校創立九〇周年の記念すべき年に、玉藻同窓会報への寄稿の機会を与えて頂き、大変嬉しく存じます。

母校の同窓生は、すでに二万余人と伺っております。そのあまたの先輩諸氏に比して、浅学非才の身ではございますが、私自身の近況報告方々、九〇周年の御祝いのメッセージを寄せることができたと存じます。

さて、私は現在、沖縄にある琉球大学教育学部に図書館情報学研修室の担当教員として赴任し、十四年目を迎えようとしています。図書館情報学という学問分野は、「人間の知情意の働きによる記号化行動、その所産としての記録と利用に関し、科学技術の立場に基づく体系的研究を行う分野」(『図書館情報学ハンドブック』丸善、1988)とされています。やや堅苦しい説明に感じられるかもしれませんが、世の中のものごとには、日常的に認識・記憶の手段として「分け

る」ことを行っています。「分ける」際には、形態別や内容別といったように利用目的に応じて並び替えを行うこともあります。いわゆる整理整頓の作業ということになりますが、そのような「分ける」行動というのは、情報の高度な利用(見つけやすい/探しやすい)につながります。「分ける」ことは「分かる」ことにつながるので。

そのような図書館情報学分野の中で、私は、「学校図書館」の研究に取り組みながら、小・中・高等学校(特別支援学校含む)の児童生徒にとって「分かる」楽しさを享受できる学校図書館の学習環境デザインについて志向してきました。この「学校図書館」研究において、沖縄は、琉球政府時代の歴史的な経緯もあり、沖縄以外の都道府県と比して先駆的な取り組みを行ってきた興味深い地域といえます。具体的には、一九六〇年代から小・中学校の図書館にも「学校図書」という立場の「人」を正規専任で配置してきたところにあります。このような、学校図書館の歴史ひとつを取り上げてみても、日本の歴史は、中央(東京)からみた歴史で語られがちです。日本の端(沖縄)から日本の歴史を眺めてみると、そ

の固定化された沖縄イメージ(学門外的期待が注がれやすい地域)により、歪められてきた歴史理解があったと感じます。地域から正史(中央)を問うことで、中央から地域への指導/受容関係から、中央と地域を相対化した思考枠組みの転換のもと、問い直していく必要があると考えます。このような、史料の「声」を聴くためには、学校図書館での「調べ(探究する)」経験が必要でしょう。

昨今の第三次人工知能(AI)ブームにおける機械学習の根幹をなすものは、「分ける」という処理にあるといわれます。先ほど申し上げたように、図書館もまた「分ける」取り組みを行ってきました。AIにより、どのように社会状況が変化していくのかを追跡すると同時に、変わらざる残していくべきものは何かを考え整理するためには、アーカイブとしての図書館が果たす役割は重要だと感じます。「ボーッと生きてしまった」としても、いつでも図書館は温故知新の砦として、利用者をあたたく迎えてくれる場所であればなりません。しかし、母校もまた、不条理な教育改革により激変を余儀なくされているのは、図書館の置かれた状

況と同様に切実な課題であることと思います。

新元号のもと新たな時代を迎える中で、母校創立九〇周年記念事業のご成功、並びに、次代を担う在校生のご活躍と母校のご発展をお祈り申し上げます。

建友玉藻会から花の贈り物

平成30年12月9日(日)、本校の卒業生で、建設・造園に携わる方で結成されている「建友玉藻会」の皆さんが花壇に美しい花を植えてくださいました。今回は16名の方が参

加してくださり、ハボタン、百五十株、パンジー、三百五十株を提供して頂きました。毎日、きれいな花々が皆さんを出迎えてくれます。



高校生の頃



松金 由佳理
(高54回卒)

麻生高校を卒業して十数年後、母校に勤務することになった。勤務初日、懐かしい校門を通り桜で満開の坂道を抜け、校舎が目に入ってきた瞬間、様々な記憶が蘇ってきた。

昨年、惜しまれながらも引退した安室奈美恵が爆発的にヒットしていたあの時代、私は麻生高校に入学した。当時流行っていたルーズソックスを履き、寒い冬でも制服のスカートを折って短くし、登下校をしていたこと。放課後、プライトホールで勉強をしたり進路について考えたりしたこと。何事も自分達で考え、時には先生方に助けて頂きながら将来の進路に向けて友人達と切磋琢磨しながら頑張っていた。

その当時、とても尊敬できる方が多かった。中でも一年生の時に担任だったI先生。見た目はとても華奢で品があり、いつも芯が一本通っていて、曲がったことが大嫌い。そのため、のんびりと過ごしていた私

達に数多くの喝を入れてくれた。ゴミの分別から授業中のノートの取り方、数々の名言も飛び出した。もちろん怒っている時には学校一恐いのだが、高校生だからといって子供扱いをしない所が嬉しくもあり、緊張感も走った。今、自分が教員という立場で考えた時に申し訳ない思いと感謝の気持ちでいっぱいになった。

三年間で強烈に残っている記憶といえば二年生の時に初めて体験した文化祭だ。クラスのメンバーでワクワクしながら模擬店について考えていたところ、0・157が流行し調理ができなくなってしまった。私達が準備したことといえば、教室の飾りつけと大量のインスタントのカップラーメンとお湯。そう、セルフのラーメン屋だったのだ。私達は、お客さんがお湯を入れるだけという何とも言えない状況を見ながら、頭の中で何度も「文化祭…」という思いがぐるぐると回っていた。当然、時間が余り他の店に行くことができたので、ある意味、文化祭を満喫できたのではと記憶している。

こうして文にしてみるとキリがない。私は通学の関係上、残念ながら部活動に加入していなかった。華々しい記録や部員との思い出等はな

く平凡な高校生活になってしまった。しかしかけがえのない日常や友人との思い出は、十数年経った今でも昨日のように鮮明に覚えている。

東京玉藻会総会開催

東京玉藻会（箕輪光博会長・高13回卒）の総会並びに懇親会が、平成30年11月24日（土）に、東京四谷のスクワール麴町会館にて、80名の出席のもと盛大に開催されました。玉藻同窓会本部役員を代表して藤崎泰助副会長が、麻生高等学校を代表して中島敏治校長が招待され、会員の皆様と懇親を深めて参りました。

東京玉藻会は、旧制麻生中学校と麻生高等学校を卒業し、現在東京近郊に在住する同窓会員の支部組織です。毎年、十一月の第四土曜日に総会を開催し、親睦を深めています。参加を希望する方は、深澤眞さん（高14回卒）までご連絡ください。

連絡先 東京都文京区目白台3-17-6 TEL 03-3943-2525

平成30年度 東京玉藻会 総会・懇親会



キャリア教育講演会報告

5月19日(土)に、ハウス食品の研究開発本部で研究主幹を務めている柘植信昭博士をお招きして、『涙の出来ないタマネギの研究』というテーマで講演をしていただきました。柘植博士はこの研究で、2013年にイグノーベル賞化学賞を受賞しています。この講演会は、茨城県教育委員会の「一人一人が輝く活力ある学校づくり推進事業」の支援を受けて実施したものです。

イグノーベル賞とは

イグノーベル賞は、1991年に創設されましたが、「人々を笑わせ、そして考えさせてくれる研究」に対して与えられるもので、ノーベル賞のパロディ版であると言われています。脚光の当たりにくい分野の地道な研究に、一般の人々の注目を集めさせ、科学のおもしろさを再認識させてくれることに貢献しています。

授賞式の会場は、サンダース・シアターでしたが、千人入る劇場で、観客で満員でした。授賞式のスピーチは1分間と決まっていますが、1分経つと女の子がやって来て、「退屈だ」と言います。「スピーチの際には必ず笑いを取る」と言われていた

ので、いろいろと考えていました。が、受賞理由が「タマネギが人を泣かせる生化学的なプロセスは、科学者がこれまで考えてきたよりもっと複雑であることを明らかにしたことである」と紹介された時に、会場が一斉に笑いに包まれました。スピーチは1分を超えるつもりで考えていました。1分を超えると女の子が近づいてきました。渡したら女の子は喜んで席に帰って行きました。このときの様子はYouTubeで見られるので、『イグノーベル賞2013』で検索してみてください。

受賞記念として、コピー用紙を1枚もらいましたが、本物のノーベル賞受賞者のサインが書いてあります。副賞として、ガラス容器に入ったハンマーが渡されましたが、緊急時にはガラスを割れと書いてあります。



ハンマーを取り出すために、別のハンマーが必要なのです。また、10兆ドル紙幣

を渡されました。ただし、ジンバブエの紙幣で、スーパーインフレ状態にあったため、当時の日本円で100円の価値しかありませんでした。受賞の後、パーティーに呼ばれましたが、副賞としてビールを1本いただきました。

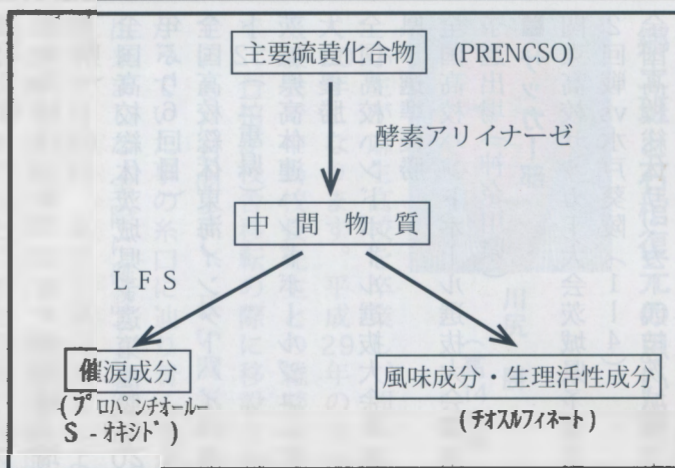
研究のきっかけ

涙の出来ないタマネギを開発したきっかけについて話します。ハウス食品の工場でレトルトカレーの製造をしている時、タマネギとニンニクの混合物が緑色になる現象が発生しました。混合物が緑変してしまうと工場では使えなくなってしまう、全て破壊することになります。そこで、「緑変現象をなんとかするように」と言われました。研究した結果、緑色素が出来るメカニズムが分かりました。緑変現象には4つの成分が関係しています。タマネギ中の主要硫黄化合物(PRENCOS)ニンニク中のタンパク質アリイナーゼ、これらを分解する酵素アリイナーゼとアミノ酸の4つです。アリイナーゼは熱に弱く、釜の温度を上げれば、緑変現象は起こらないことが分かりました。

きます。ニンニクのアリイナーゼを使うと、より多くの色素が出来るのです。従来は、主要硫黄化合物(PRENCOS)が酵素アリイナーゼで分解されて中間物質ができて、中間物質から催涙物質への変化は自然に起こるのだらうと思われていました。しかし、主要硫黄化合物に精製したアリイナーゼを作用させても催涙成分は全くだまませんでした。そこで、催涙成分の生成には未知の成分が関係しているのだらうと考え、その成分を解明したいと考えました。催涙成分の生成を止めてやれば、タマネギを切っても涙が出ないことになります。涙が出なくて体にも良い新しいタマネギができることになるのです。

催涙成分合成酵素を発見するまで

しかし、酵素の精製に2年かかり、会社からは「いつまでかかるんだ」と怒られました。そこで、酵素の遺伝子構造を調べました。遺伝情報は、4種類の塩基A・G・C・Tの配列順序で表されますが、その解読に1年かかりました。そして、この遺伝情報を基にタンパク質を合成しました。主要硫黄化合物(PRENCOS)にアリイナーゼを作用させて分解し中



間物質をつくり、この中間物質に合成したタンパク質を作用させると催涙成分ができました。これは、今までの常識をくつがえす発見でした。私達はこのタンパク質を催涙成分合成酵素LFSと命名しました。

イギリスの科学雑誌に『NATURE』があるのですが、私達はこの発見を論文として『NATURE』に出そうということになりました。「載るはずはない」と思いましたが、記念受験のつもりで論文を出してみました。

すると、翌日『Unfortunately』で始まるメールが届きました。「論文掲載が断られたのだ」と思いました

が、よく読んでみると「本文がついていないから、本文を送れ」という内容でした。そこで、本文を送ると、3日後に、「4ページは無理だけれど、短くするならOKである」という返事がきました。そして、A4版1枚の論文が2002年10月17日に掲載されたのです。

涙の出来ないタマネギを開発するまで

『NATURE』の論文の中で、「催涙成分合成酵素LFSの働きを抑えれば催涙成分ができないので涙が出なくて体にも良い夢のタマネギができるはずだ」と書いたところ、アメリカの研究者から反論が来しました。「催涙成分合成酵素LFSの働きを抑えたら、本当にタマネギは育つか?」というのです。すると、ニュージーランドの研究者からは、「タマネギの遺伝子組み換えによりできるはずだ」と言われました。そこで、2003年から研究を開始し、2007年に完成しました。その種を育てると開花し、きちんとタマネギの玉もできました。催涙成分はできずに、タマネギの風味成分・生理活性成分であるチオアルブイトがきちんとできて、その量もぐんと上がったのです。

日本では遺伝子組み換えによる農産物は販売できないので、涙の出ないタマネギを遺伝子組み換えの技

術を使わずに作りたいと考えました。催涙成分合成酵素LFSの活性に重要な部分は、71番目のアミノ酸のアルギニンと88番目のアミノ酸のグルタミン酸であることが分かったので、この部分に注目しました。私達は、理化学研究所に行つて、原番号10番のNeを加速しタマネギの種子に当ててもらい涙の出来ないタマネギを創ろうと考えました。1回目できず、2回目もゼロ。3回目ですと涙の出来ないタマネギができました。種子をまきタマネギを収穫するまで、一回りで2年かかるので、それを3回繰り返したため、6年かかったわけです。研究を開始して10年かかって、2015年にやっと涙の出来ないタマネギを創ることができました。調べてみると、当初期待した催涙成分合成酵素LFSが変異していたわけでなく、アリイナーゼが変異していました。

こうしてできたタマネギは『スマイルボール』と名付けられました。涙がでないだけでなく、辛みが抑えられ甘みが出るという特徴がありました。最初は、東京の伊勢丹で販売されましたが、現在では、東京、大阪、名古屋で販売しています。

研究生活から学んだこと

研究生活から学んだことは、研究は思い通りに進まないことが多いと

いうことです。その時、止める理由を考えるのではなく、どうやって乗り切れるかを考えることが重要です。よく考えて、調べて、上司や同僚、研究仲間と相談しましょう。「どうしてもやり抜きたい」という気持ちが大切です。どうしてもやりたいという人には、助けてくれる仲間が現れます。失敗も大きな糧になります。悔しいという気持ちを忘れないことです。

『四つ葉のクローバー』は珍しいから価値があります。しかし、自分で探してみると、結構あるもんです。探そうという気持ちが大変なんです。努力すれば、皆さんも、たぶん見つけることができます。人は知りたいことがあるから努力するのです。自分が出るからする、出来ないからしないのではなく、やる気があれば楽しく出来るのです。私は、2014年7月18日に、北海道の網走に出張した時、公園で30分探して1つ見つけました。

「オートファジーの解明」の研究で、2016年にノーベル整理・医学賞を受賞した大隅良典教授は、「大学の構内を散歩していれば四つ葉のクローバーは10分ほどで発見できます」と言っています。私は30分で一つです。すから、イグノーベル賞受賞者と本家のノーベル賞受賞者の違いですね。

部活動の記録

■野球部

春季県東地区高校野球大会第3位
第100回全国高等学校野球選手権
記念茨城大会1回戦vs多賀(0-1)
秋季県東地区高校野球大会第3位

■男子ハンドボール部

関東高校ハンドボール大会茨城県予
選第3位
関東高校ハンドボール大会出場(埼
玉県)

全国高校総体茨城県予選第3位

■女子ハンドボール部

関東高校ハンドボール大会茨城県予
選第3位
関東高校ハンドボール大会出場(埼
玉県)

全国高校総体茨城県予選第優勝(20
年ぶり6回目)

全国高校総体東海インターハイベス
ト32(三重県)

茨城県高体連ハンドボールジュニア
大会優勝

全国高校ハンドボール選抜大会茨城
県予選準優勝

全国高校ハンドボール選抜大会関東
予選出場(神奈川県)

■サッカー部

関東高校サッカー大会茨城県予選会
2回戦vs水戸葵陵(1-4)
全国高校総体サッカー競技茨城県予

選1回戦vs東洋大牛久(0-1)

全国高校サッカー選手権茨城県予選
会決勝トーナメント1回戦vs第一学
院(1-3)

茨城県高校サッカー新人大会1回戦
vs東洋大牛久(0-2)

■女子バスケットボール部

関東高校バスケットボール大会茨城
県予選県東地区大会優勝
全国高校総体茨城県予選県東地区大
会優勝

全国高校総体茨城県予選ベスト16

県東地区夏季大会優勝

関東高校新人バスケットボール大会
茨城県予選県東地区大会優勝

■男子バスケットボール部

関東高校バスケットボール大会茨城
県予選県東地区大会出場
全国高校総体茨城県予選県東地区大
会出場

関東高校新人バスケットボール大会
茨城県予選県東地区大会出場

■陸上競技部

茨城県県東地区高校陸上競技選手権
大会 女子400m 第1位
茨城県高校総体陸上競技選手権大会
出場

茨城県陸上競技選手権大会 女子
400m 出場

県東地区新人陸上競技対校選手権大
会 女子100m 第1位

県東地区ロードレース大会 出場

■弓道部

関東高校弓道大会茨城県予選会男子
団体・女子団体出場
全国高校弓道大会茨城県予選会男子
団体・女子団体出場

関東高校弓道個人選手権大会茨城県
予選会出場

全国高校弓道選抜大会茨城県予選会
女子団体出場

女子個人4位

2C 渡辺真梨愛

■卓球部

関東高校卓球大会県東地区予選会

【個人】男子1位・4位、女子3位

【ダブルス】男子3位(県大会出場)

全国高校総体卓球県東地区予選会

【個人】男子4位・5位、女子5位・
6位・8位

【ダブルス】男子5位

【学校対抗】男子2位(県大会出場)
全日本卓球選手権大会ジュニアの部
県東地区予選会

【個人】男子ベスト8、ベスト16(県
大会出場)

県高校卓球新人戦 男子団体ベスト
16

■男子ソフトテニス部
関東高校ソフトテニス大会県東地区
予選 出場

全国高校ソフトテニス大会県東地区
予選 出場

茨城県高校ソフトテニス大会県東地
区予選 出場

関東高校ソフトテニス大会茨城県予
選 出場

関東高校ソフトテニス大会県東地区
予選 出場

全国高校ソフトテニス大会県東地区
予選 出場

新人戦県予選 出場

■女子ソフトテニス部

関東高校ソフトテニス大会県東地区
予選 団体3位 個人ベスト16

全国高校ソフトテニス大会県東地区
予選 団体3位

県高校ソフトテニス新人大会県東地
区予選 団体3位 個人ベスト8

県高校ソフトテニス新人大会 女子
団体ベスト32

県東地区夏季大会 個人ベスト16

■女子バレーボール部

関東大会県東地区予選会 第三位
県大会出場

新人大会県東地区予選会 第三位
県大会出場

■書道部

茨城県高校総合文化祭美術展覧会
書道の部

高文連準大賞 2A 平塚舞

入選(7名)

1A 穴戸穂乃果・関伊寿美・
堀米りかこ

1E 根本真奈・2E 大野美綺

3E 川嶋千帆・宮川葵

茨城国体都道府県別応援幟旗制作

■美術部

茨城県高校総合文化祭美術展覧会絵

画の部入選 2C 佐竹 凜

茨城県国体都道府県別応援幟旗制作

■吹奏楽部

茨城県吹奏楽コンクール県東地区大会 優良賞

茨城県アンサンブルコンテスト県東地区大会 優良賞

第32回茨城県高校演劇祭県東地区大会 上演

地区大会 優良賞

■演劇部

第32回茨城県高校演劇祭県東地区大会 上演

地区大会 優良賞

■アート部

文化祭に作品展示・販売

茨城県国体都道府県別応援幟旗制作

■写真部

茨城県高校総合文化祭美術展覧会写真展 入選(7名)

1A 小澤尚也・野原瑠斗

1B 岩本太洋・1C 山本朋美

1D 石神千愛・1E 松本莉奈

2B 根本秋香

■カルタ部

全国高校総合文化祭小倉百人一首かるた大会茨城県予選会 出場

全国高校小倉百人一首かるた選手権

茨城県予選会 出場

茨城県小倉百人一首かるた秋季大会出場

■JRC部

校内エコキャップ回収活動

花いっぱい運動

玉藻祭エコキャップ回収参加

■文芸部

玉藻祭参加 文集(七つ星) 発行

なめがた狂歌作品応募 入選二名

◆ ◆ ◆
高校生活を振り返って

三年A組 高野 稀汐

高校生活三年間は、とても充実し、濃い時間を過ごすことができました。なぜなら、私は女子ハンドボール部に所属しており、その活動を通して自分自身を大きく成長させることができたからです。

私が麻生高校に入学した大きな理由は女子ハンドボール部に所属したいと思ったからです。中学校の部活動で何度も一緒に練習をさせて頂いていました。先輩方の練習に取り組む姿勢を近くで見えていて、私も麻生高校の女子ハンドボール部に所属し、チームの一員になりたいと思

い、入学を決意しました。入学後は、「茨城県一位を掴み取る」という大きな目標を達成するために、高校生活の大半の時間を部活動に費やしました。自分たちの代ではキャプテンを務め、目標を達成するために、学校生活において「自律」を心がけ努力を続けていました。ところが、私は

高校二年生の冬に全十字靱帯断裂という怪我をしてしまい、プレーをすることができなくなり、とても情けなく、悔しい思いをしました。しかし、そんな時に支え、励ましてくれたのはチームメイトでした。私は改めて多くの人に支えられていることや仲間の大切さを実感することが出来ました。そして、先生方や地域の方々を支えて頂き、たくさんの方のおかげで、高校総体県予選会で「茨城県一位を掴み取る」という目標を達成することが出来ました。目標を達成するために、常に学ぶ姿勢を忘れずに努力を続けたことは、私の人生においてとても大きな財産となりました。

私は高校卒業後、大学へ進学し、ハンドボール競技を続けて行きたいと考えています。大学でも競技を続けるということに多くの不安もあります。しかし、今まで私を支え、応援してくださった方々に、大きく成長し、逞しくなった姿を見せられる

よう、挑戦し続け、日々精進していきたいと思っています。

最後に、私は高校三年間でたくさんの方々に支えられ大きく成長することが出来ました。これからの人生でも、謙虚さを忘れることなく何事にも全力で取り組み、支えてくださったたくさんの方々之恩返しをしていきたいです。



三年D組 羽生 雄大

三年間の高校生活を振り返ると、とても充実したものになることが出来たと感じています。その理由は、運動面・学習面の両方で、目標を達成することができたからです。

私が、約三年前に麻生高校への進学を決意したことの大半の理由は部活動でした。中学校でハンドボール部に所属し、最後の大会をきっかけて、「麻生高校でハンドボールを続けて、関東大会に行く」という思いから入学の決意をしました。入学してからは関東大会出場という目標を果たすために、ハンドボールの技術はもちろん、私生活の面でも徹底し、己を磨き続けました。私自身、キャプテンを務め、多くの苦難はありましたが、先生方やチームスタッフの方々、地域の方々にも支えていただき成長することが出来ました。そして何よりも、チームメイトの存在が大きく、チーム全体で鼓舞し合ったことにより、関東大会出場の切符を掴むことが出来ました。その瞬間は、今でも鮮明に覚えています。そして、これから先も私の大切な財産として心に残り続けると感じています。

学習面では、自らの第一希望の進路に合格することが出来ました。私は高校一年生の中頃から「市役所職員になる」という目標を明確に決め、

公務員採用試験の勉強を始めました。しかし、文武両道を心掛けていても、部活動に偏ってしまうことがありました。しかし、少しずつ勉強を進めていきました。部活動での最後の大会を終えてから公務員採用試験までは、それまで以上に勉強に励みました。その結果、一次試験を突破することができ、二次試験、三次試験も多くの先生方が支援してくださり合格することが出来ました。

来年度からは公務員になるので、今まで以上に責任感を強く持ち、精進していきます。そして、とても難しい夢ですが、新天地でハンドボールを広めたいと考えています。ハンドボールは行方市で盛んなスポーツであり、私を成長させてくれたスポーツです。行方市にもハンドボールにも恩返ししたいと考えました。

高校生活の三年間、私は多くの方々のご支援をいただいて成長することが出来ました。その感謝の気持ちを忘れずに、これからも挑戦し、努力を続けることで自らの成長につなげていきたいです。

進路別見学会報告

本校では、二年生で進路別にわかれて、校外で体験型の見学会を実施しています。今年度は、七月四日(水)に、6コースに分かれて行いました。

この事業は、茨城県教委の「一人一人が輝く活力ある学校づくり推進事業」の支援を受けています。

【見学先】

1. 明治大学←貨幣博物館
2. 中央大学後楽園キャンパス←日本科学未来館
3. 早稲田大学戸山キャンパス←JICA
4. 大正大学←学習院大学
5. 県立医療大学←水戸メディカルレτζ
6. 花王株式会社鹿島工場←千代田グラビヤ潮来第一工場

【参加生徒の声】

私たちが行ったのは明治大学駿河



県立医療大学にて

台キャンパスで見た。今回の大学見学の、実際に学で、実生活の雰囲気や学生の人たちの生活を知ることができて、自分の進路をより考えることが出来ました。大学に見学に行き、東京の有名な大学に入れたらど

んな生活になるのだろうか、学生生活を楽しんでいる大学生を見て、勉強の意欲がわきました。

ブリティッシュ・ヒルズ語学研修

7月21日(土)〜23日(月)の3日間、1学年生徒15名が、福島県岩瀬郡天栄村の語学研修施設「ブリティッシュ・ヒルズ」で研修を行いました。移動中も含め、滞在中は英語のみで生活する「異文化体験プログラム」を通して、国内にいながら海外で学んでいるような、貴重な体験をしてきました。この事業は、茨城県教委の「一人一人が輝く活力ある学校づくり推進事業」の支援を受けて実施したものです。

